ウォーデンクリフの世界システム　～世界の取扱説明書～

安藤　頼庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウォーデンクリフの世界システム　～世界の取扱説明書～

【Ｎコード】
Ｎ１６１８ＣＯ

【作者名】
安藤　頼庵

【あらすじ】
何時何時（いつなんどき）、如何なる場所でも、僕は孤独だ。
われわれはどこから来たのか　われわれは何者か　われわれはどこへ行くのか
などとご大層なことを考えるほど、僕は利口ではない。
だが、それでもしかし、何をどうしたって、
主語がわれわれ、人間たちでなくても、
僕は僕自身のことを考えずにはいられない。
１９１０年、電気黎明期、アンドリューライアンは不思議な本を持

って旅に出た。

自分とは何か、死とは何か、恋とは何か、などなど様々雑多な根源的な問いに自分なりの、または偉人なりの答えを提示しています。哲学者見習いが中学2年の弟の自己同一性を拡散させる（＝自分が誰だかわからなくさせる）ために書いているファンタジー小説です。中二でもわかる大学レベルの哲学といった実学的小説を目指しています。

ストーリー的にはゆくゆくはエレクトリックパンクになる予定でつ。なお女っ気は現状かなり少ない模様。

この小説には実在した偉人や建造物、病気の名称が出てきますが、基本的にフィクションです。多分史実と大きく違います。信じないでください。

また、哲学思想はごちゃ混ぜで、僕自身の思想もあります。時としてあなたには誤った解釈があると思いますが生暖かい目で宜しくお願いします。

できれば自分自身で解釈を打ち立ててくれることが本当の望みだったりします。「僕はこう思う」を感想にでも書いていただくと割と励みになります。

文章への指摘や批判は大募集です。こちとら藤四郎なもので。

0－1

何時何時（いつなんどき）、如何（いか）なる場所でも、僕は孤独（こどく）だ。

われわれはどこから来たのか　われわれは何者か　われわれはどこへ行くのか

などとご大層なことを考えるほど、僕は利口ではない。

だが、それでもしかし、何をどうしたって、

主語がわれわれ、人間たちでなくても、

僕は僕自身のことを考えずにはいられない。

僕はなんなんだ?

霊長類ヒト科ヒト目ホモサピエンス。

そんなことを言ってるわけではない?

僕は、僕だ。

それを証明しろと?

それを証明するのは僕が今思考していることくらいだろう。

我思う、故に我あり。

僕が今こうして考えているから僕はここにいる。だっけ。

本当はこんなよくわからない事で証明などできる気はしない。

僕自身あまり思想を持たずに生き続けてきたから。

でも両親も死んでから僕は、一人だ。

ずっと一人だ。

これくらいしか証明できるものがない。

僕はどこから来た?

母親から。冗談。

それともコウノトリが南国トオイトオイ共和国から運んできた?

ナンセンス。

実際のところ。
実際のところ、僕がどこから来たなどどうでもよくないか？
僕はどこへ行くのか、それこそが大事じゃないか。

人は産まれてから、
どこかから来てから、
ずっと何処かへ行き続けている。
それは成功していても、失敗していても変わらない。
その向かう道のりは大きな違いがあるけれども。
もしかしたらその何処かなど、ないのかもしれない。
円を走るかのように、一周するだけなのかもしれない。

でも僕は、僕の場合は、例え目的地がなかったのだとしても、
円の大きさは、周回点は、その目的地は、何処かがは、
はっきり決まっていたのだろう。
林檎（りんご）一つを机の上に十年置くと腐りおちるように、
円を一周すると元の場所に戻るように、
決まりきっていた。

それは僕が僕でなくても、
僕以外の僕が僕のところにいたとしても、
きっと同じことになっていたのだろう。
幸いなことに、または不幸なことに、僕は僕だ。

１０年経った今でもまだ腐っていない。
手も、足も、体も。なまってはいるけれど。
でもこのままだと僕は近いうちに腐るだろう。
ひょっとしたら中身はもう腐っているのかもしれない。

それでも、僕は大きな決断をする。

今までの生活などゴミ屑(くず)のようなものだ。
生きていて死んでいるようなものだ。
煩雑(はんざつ)にしまわれたタンスの奥で
日の目を一生見ることのない靴下の真似事をするつもりはない。

一人でチェスをやって一日過ごすのも、
くだらない本を読んで一日過ごすのも、
誰かの日陰で一日過ごすのも、
今日で、終わり。

昨日までの全ての経験とともに僕は新しい人生を始めるんだ。
それが、今まで何一つ自分で決めたことのない僕が
唯一自分で決めた、新しい自分。

そんな決断をしてもきっと、
決まりきっている目的地など変わりもしないのだろう。
きっと世界には全く影響なく、意味などないのだろう。
それでも僕にとっては大きな意味がある。
時間はまだまだいっぱいある。

0－1（後書き）

自分って何か答えられる人います？
教授に聞いても分からないっていうんですよお

0－2

「あれは死を呼び込む。事実、彼の両親は…。」

「ライアン夫妻はきっと彼に殺されたのよ！だって…」

「彼の両親の死に顔を見たんだ。この世のものとは思えない、すごい顔だったよ…。
何をされたらあんな顔になるのだろう。今にも夢に出るんだ。それに…」

「あいつの叔母があいつを引き取りに来たんだ！でもその日のうちに彼女は死んでしまっていた！殺されたんだ！」

「問題は誰も彼女の死因が分からないってことだな。誰かに殺されたのは違いない。
でも残っているのは死神だけだ。そうでなければ五歳児が顔をズタズタに切り裂いたのか？」

「ステーキみたいだったよ。そうじゃなきゃチェス板みたいだった。斜めに、こうやって。」

「恐ろしい。本当に恐ろしい。皆恐怖に取り憑かれたようでした。目が鼻が口が…あんな裂けて…。」

「今やあの子は家から出てきもしない。あたしゃね、あの子が五歳の頃から顔を見ていないんだ。
もしかしたら、もう、死んでてもおかしくはないとはいつも思ってたんだけど。煙突から出る煙があの子の唯一の生存証明だった。」

「俺たちは、その、最初は彼を助けていたんだ。だってそうだろう。五歳の子が一人で生きられるわけがねえ。見殺すのは人としてどうかしている！街で話し合って彼を育てることにしたんだ。」

「街で育てると言い出したのは誰だったか？フン。まあ決まっちまったものは仕方がねえと半ば諦めていたんだがな！
彼奴が死を呼ぶ死神だとわかってから、叔母が死んでから俺らの義務も霧散（むさん）したわけだ。」

「一度孤児院に入れようって話があったんだけど、断られたんだって。パパが言うには彼は悪魔だって皆が叫ぶから…」

「それでもあのヒトのいい雑貨屋は慈善活動とやらを続けていたらしい。
確かに彼が見殺しにするのはどうかと思うが、それでも俺たちは…その…怖かったんだ。その…雑貨屋には、感謝してるよ。」

「隣人だからかあの家の隣の家族はちょくちょく大鍋を持って出入りしているのを見たことがあるよ。ま、あそこの奥さんはお節介焼きだからねぇ。」

「火事は本当に突然だったんだ！あれよあれよと言う間にあの家は火に包まれていた！これでこの街に安寧安定（あんねいあんてい）が訪れたわけだ！そうだろ？」

「もしあの家にいたのであれば彼は死んでいるのだろう。でも探したけど彼の屍体は見つからなかったんだ。」

「僕は知ってるんだ。あの後こっそり瓦礫（がれき）から使えるものがないか

って探したんだ。
そしたら落とし戸があって、地下室を見つけたんだ！そこにはナイフが刺さった動物の皮と骨が祭壇のようなものの上にあったんだ！怖くて、まだ皆には言っていないけど、すぐに見つかると思う。」

「とにかく！あのガキが死んだにしろ生きているにしろここからいなくなったんだ！それでいいじゃないか。」

「彼が何処かに行ったのだとしたら、それは正しいことだと思う。彼が死神を呼び寄せている証拠などない。
でも彼が呼び寄せていないことを証明するにはあまりにも人が死にすぎている！
もし彼が人を殺めてしまうのが決まっているのだとするならば一人で生活するのが正しいんだと思う。」

「あの子は悪くない子だったよ。いい笑顔でね、お礼もしっかりできていたんだ。こう、ありがとうございましたって。
拙い言葉遣いだったけどもね。小さい時からそんな子だもの。どこに行ってもうまくやれるんじゃないのかしら。」

「死んだ獣の祭壇には不自然な血の跡があったんだ！
血は真っ黒で固まっていたみたいだけど、四角い何かがちょうど置かれていたかのようにぽっかりとそこだけ血が付いていなかったんだ。
そこには何があったんだろう？」

0－2（後書き）

噂されるより悪いことがある。それは噂にもされないことだ。
先人はやはりいい言葉残してますよね

0－3（前書き）

考える時間でつ
ぶっちゃけ理解できなくてもいいというか割とお茶濁してます。
お前は何者かって答えられる人いないと思いますよ。多分。

0－3

「火を見るよりも明らか、とはいったいどういう場合に当てはまるのか？
だってそうだろう？実際に火を見た方が、明るいことは勿論ながら、明らかでもあることは火を見るよりも明らかなことではないか！で、実際に燃え盛る我が家を遠目に眺めていたお前には分かるだろう。
何か、明らかなものはあったのかな？」

手に持った杖を遊ばせながらその男は言う。
白い髪を後ろに流し白い顎鬚（あごひげ）を生やした
白目玉の老紳士は、言い続ける。

「それは自分。それは自身。火を見ると人は何かを感じるのだ。
それはまるで遺伝に紐付けられたかのように逃れられないものだ。
人間は遥か太古ウホウホとよろしくやっていた頃から火との付き合いがあるのだ。
そのことを考えたら人が火を敬うのは、
崇（あが）めるのは、当然のことじゃあないか。
人間は火でできているんじゃないかと錯覚（さっかく）することだってある。
さすがにそれは言い過ぎとしても、
火が我々の祖（そ）であることは否定しがたいと私は思うね。
神なんかといった曖昧（あいまい）なものよりも
ずっとはっきりと人間を救っているじゃあないか。
さながら無力な赤子の生活基盤を面倒見るがごとく、
直接それをせずとも、本質的にそれをするところなんて、
父親そのものじゃあないか。
人の魂が火に例えられやすいのはこれも起因している。

温もりを求めるのも、良き者を暖かいと表現するのも、
我々が火の子供であるからに違いないと思わんか。なあ、ライアン。
」

この場所はまるでどこか隔絶(かくぜつ)されたかのような場所だった。
空には所狭しと星が散らばり、いや、空だけでない。
僕が踏んでいるはずの、踏みしめているはずの、
足元にもやはり空と同じく壮大な景色が見て取れる。
見渡す限りの全方向を夜空の星々に囲まれた、そんな場所だった。
男は浮いているようにも見てとれる、
まるで天まで届くような逆三角型の大きな椅子の小さな座席から立ち上がり、
杖を遊ばせ、続ける。

「人々は根源的(こんげんてき)なものをあまりに蔑(ないがし)ろにしすぎた。
火を見るより明らかというがそれはなぜだ。
火を見るまでもないからだ。
我々は知ったつもりになっているのだ。
その火が何か。
見るまでもなく、
考えるまでもなく、
考える必要もなく、
過ごせているからといって、
果たしてそれを考えないでいい理由にはなるのだろうか。
それを蔑ろにしていい訳にはなるのだろうか。
人間は世界の解釈を、
圧倒的少数に、
見も知らぬ他人に、
任せて世界を理解したつもりでいる。
それどころか、自分のことすら分からず生きている奴もいるじゃあ

ないか。
寧ろそちらの方が多いくらいだ。
自分自身の解釈すら他人任せなきらいがある。
さて、ここで問おう。お前は、何者だ。」

僕は…。

「当然のことながら名前、性別、生年月日や血液の型、生まれた場所や所属などその他の一切合切の下らない事柄などどうでもいい。
それは見も知らぬ、付き合いもない他者が、あるいは取るに足らない隣人が、
お前を特定するときに使うもの等だ。
人は身体的外見的社会的客観的特徴を抜くと
残るものが著(いちじる)しく少なくなるのだ。
さあ、言ってみろ。」

お前は、何者だ。
僕は。
僕は、僕は、僕は。

「僕は…僕だ。僕が今こうして悩んでいることこそが、僕が僕であることの証明だ。」

「下らん!下らなさすぎる。興ざめだ。がっかりしたよ。
絶望的だ。壊滅的だ!いやそれよりかずっと下等なものだ!
お前が言ったことは、結局のところ、それは逃げ口上でしかないのだよ。
汎用的(はんようてき)で凡庸的(ぼんようてき)だ。
いやそれ以下だ。追い詰められた思考の逃げ場でしかない。
考えることをしていない。

虎の言葉を狐が言ったからといってそれは虎の言葉かというとそうではない！
お前は虎の言葉の言葉だけを鳴らしただけだ！
言葉とは酷く曖昧で抽象的なものなのだ！
そのくせ言葉は扱えないものの生活をフイにするほど幅を利かせている！
真に重要なのはその意図その心その考えであるというのに。
言葉はどこから生まれる？考えからだ。
表現しがたい、形容しがたい。名状しがたい、あれやこれやが！
あれやこれやが、複雑怪奇に絡み合い鬩ぎ合い！
そのようにして生まれた考えをたった少しの文字列で表せるような狭量な言葉に押し込めるのだ！」

「凄い！」とな。
言ってくくくと笑うその男を僕は知らない。
その話の内容を僕はわからない。

「話が逸れてしまったな。
先にお前が言った言葉はある男が全ての存在を片っ端から疑りかかった時に、
自らの存在だけは疑えなかったのだ。
今こうして疑っている、思っている自分の存在を誰が否定できようがない。
「我思う、故に我あり。」
それがこの言葉の生まれた経緯だ。
この言葉が意味するものは、
自分の存在が、他のあらゆる存在の存在により成り立つということだ。
その存在による、その存在に対する影響力を問わず、
実在を疑える他の存在がただ存在することで我々の存在が証明され

るのだ。
他の存在があるからこそ、疑えるからこそ、自らの存在の証明ができるのだ。
すなわちのところ、自分とは他の存在無くして証明できない存在なのだよ。
そして、お前がお前自身の存在を否定できないよう、
その他のあらゆる存在も、それら自身の存在を否定できないのだ。
万物は存在を相互保障しているのだよ。
だから万物全てと自分とに関係性ができるのは当たり前だ。
自分とは実際のところ自分ひとりでは決められないものなのだ！
自分とは、自分以外のあらゆるものとにより決定される、相対的なものなのだ。
お前が自分の顔を自分で見ることができないよう、
触るなど少しの情報しか得られないように、
自分ひとりを自分で知れることはできないのだ。
そしてそれの良し悪しなど比較でしか語れないものなのだ。
さて、最後に問おう。お前は、何者だ。」

わからない。だが僕はわかっていた。僕は知っていた。僕は僕自身で今知った。

「僕は、自分だ。」
遺伝に紐付けられた多くの生物の中の人間という種のひとり。
周り全ての極一部にしてただひとつ。
この世界でただ一人、認識ができる存在。

「そうだ！そのとおりだ！
その惨めな、代え難い自分をひっさげて堪え難き生を見事に死んでいけ！
アンドリュー・ライアン。

そのあり方を、私は許そう。
次会うときはこうは易(やさ)しくはいかないだろうな！」

ふっと、上から夕暮れに染まる赤い空が、
降ってきたと思ったら次の瞬間には僕が元いた、木陰と木の背もたれがそこにはあった。
目を瞑らなければならないような強い風が、瞬時に無風へと化した時のように。
僕の心は体は落ち着いていても、それでもざわついていた。

僕の手には、膝の上には、読み終わったように閉じられた本。この本。
開いたら文字が小虫が蠢(うごめ)くようなさざめきを見せ、視界がぼやけ。
気付いたらあの狂人が前にいた。戯言を長々と吟じられてしまった。
もう一度開いてもまたあの様相になるのだろう。

親の本棚にもしまってなかったこの本は、
地下の隠し部屋に鎮座(ちんざ)する獣の屍体の祭壇の上に置かれていた。
まるでこの本を崇めるように。
両親が死んでから見つけたこの本。
明らかに他の本とは装丁(そうてい)が異なり丁重に扱われていたであろうこの本。
開けてはいけない気がして今まで開けなかったこの本。
燃やして失くしてはいけない気がして、親の形見のつもりで持ってきたこの本。

本の中に2通の手紙が挟まっていた。

僕宛と、知らない人への紹介状。

父から僕に当てた手紙はもし父らに何かあった場合はこの人を頼りなさい。
場所はどこそこでとかそういった事のみ書かれていた。
今まで、この１０年も気づかず燻(くすぶ)っていたことが本当に悔やまれる。
もっとわかりやすい場所に置いてくれていても良かったのに。
この本自体については全く触れていなかった。
存在すら匂わせてもいなかった。

紹介状、と書かれたそれの宛名は知らない。
だがこの手紙が何か大きな出会いをもたらすことを期待していた。
旅に出てから早2日。
まだ2日と言うべきか。
ようやく遠目に見れる距離になってきた。
「あれが…。」
遠目に見えるあれ。あれが目的地。
あれこそが世界の最先端。人々が思い描いた幻想都市。
「ウォーデンクリフ…。」
このままのペースだと明後日には着くだろう。
夜が近く薄暗くなってきているにもかかわらず、
山のようなその都市、遠くにあるであろうその都市は
煌々(こうこう)と存在感を示していた。
少し休みとするか。明日からの旅に想いを馳(は)せ、木陰の僕は目を閉じた。
後ろからカサカサと木の葉の音が心地いい。僕は人生を掴み取るんだ。

0－3（後書き）

正直この本について語るあたり冗長だと思ってる。
エネルギー溜まったら改正します
改行とかいうクッソ高等なテクニック。
改行うざくありません？そう感じたら感想欄にでもお願いします。

0－4　／　0章完

「どなたかね？」
すっかり暗くなった街をゆらゆら揺れる線で繋がる街灯が明るく照らす。
道道には忙しそうに自動車（モービル）が走っている。
眩（まぶ）しいくらいの家の中から出てきた、立派な口髭を蓄えた痩（や）せ型の中年。当然ながら初対面だ。
体型が細いのか、きている白衣はだぶついて見える。ノブにかけている手は細く褪（あ）せていた。

「こ、これを…。ご確認いただいていいですか。」
「今すぐかね？」
「はい…。できれば。」

そうしないと唯一のあてが外れることとなる。それは避けたい。
もう野宿は嫌だというのが本音。
あの場所に戻るのは既に選択肢には入っていない。
ぴらぴらと紙のする音がする。
正直言って今回生活基盤を支えてもらえる気はしなかった。
それでも藁にもすがる思いでとここまで来た。
心臓は煩いくらいに鳴っている。
もしかしたら、そんな淡い希望を抱いていた。
しかしそれは間違いだったのかもしれない。
うーむと唸るような声。
こちらをちらと見てまた手紙に目を移す。
険しい表情は益々険しさを増していく。
「顔をよく見せておくれ…。中へおあがり。」
彼に通された部屋は、柔らかいソファにパチパチと火の音のする

暖炉、壁紙は白く、植物柄を模した衣装が目立たない程度に部屋を飾る。

かけてくれ、という言葉でソファに座る。柔らかい。涙が出そうなのを我慢する。

彼はいきなりどうしたことか、はっと驚いた表情を浮かべていた。口は完全に開いており、何がなんやらわからない僕は後ろを見たが、特に変わった様子はない。背後の視界にはおしゃれな白い壁しかない。

また彼のほうを見た僕は驚いた。

彼の表情が先のような厳しいものでなく、慈愛（じあい）に満ちたような、微笑ましい表情をしていたから。

「そうか、君がアンドリューか。君も大変だっただろう。中へ入りなさい。ここがこれから君の安らげる場所になればいいが…。」

驚いた。てっきり断られるかと思っていた、というか諦めていた。あんな申し訳なさそうな顔をしていたら誰でもそう思うだろう。

「申し訳ないが…」と言いだしてもおかしくない、むしろ言い出さないことが不思議な顔だったのに。

僕は内心小躍りどころか有頂天だった。

安堵（あんど）のため息が漏（も）れてしまった。全身の筋肉は驚くほど弛緩（しかん）している。

きっと今「なんていうとでも思ったか！」なんて素敵すぎるサプライズを喰らったら絶望して死ぬかもしれない。

まあ、そんなことはなく、というか彼、ドレヴニーヤ先生は、当然のことながらそんな人ではなく。

「ここが君の部屋だ。少し狭いが、自由に使ってくれ。普段は、その、入院の必要がある患者の居室なんだ。何か変なものがあったら

教えて欲しい。後で君のお父上についての思い出話をしよう。部屋に荷物を置き適当に準備を済ませたら下へ降りてきてくれ。もう夜だ。食事をとろうじゃないか。まだ食べていないだろう？それに色々話などもある。ライアン博士については何から話していいものか。」

ベッド、クローゼットなど家具一式が揃った部屋だった。

これは正直、十分以上だった。

初めての自分の部屋に気持ちはとても高揚（こうよう）していた。

仕事と賃金だけ貰えて下宿から通いということも普通に考えていたが。

「ありがとうございます。ですが、いいんですか？」

「なに、明日からはしっかり働いてもらうさ。ははは。」

手記　5月3日

ドレヴニーヤ氏。

彼の好意によって、職どころか衣食住の支援もしてもらえたことに、僕は驚嘆（きょうたん）を隠しきれない。

部屋まで頂いたんだ。明日からは彼に少しでも恩を返せるよう努めなくては。

彼に断られていたらどうなっていたかは最早考え難い。

ここまで行き当たりばったりな出で立ちはどうかと思うけれども、ここのところすごくついている。

それにしてもここは不思議な場所だ。

ウォーデンクリフ。

天に届くかのような大都市。

中階層であるここ、七階層でも頂上があるのかわからない。

道道に連なる街灯は夜だろうと明るく道を照らす。
聞く話ではエディスンというすごい人が試験的に設置しているという。
それに、なんといっても各階層間の移動手段。
それは蒸気式歯車階車（スチームコグレール）という乗り物だった。
カタカタと音を上げながら、歯車（コグ）が噛み合うのと白い煙がゆらゆらと霧散していくのを車内からじんわり眺めているうちに、斜めにゆっくり上がっていく奇妙な乗り物に僕は感動すら覚えたものだ。
更に階層円環大通り《ＲｏｕｎｄＡｒｏｕｎｄ（ラウンド・アラウンド）》には鉄道（レイルウェイ）が走っていて。それに沿うように自動車（モービル）が忙しそうに走っている。
正直何度か轢（ひ）かれそうにもなったり。まあ、世界最先端は伊達（だて）ではないということか。
じきにこの技術は世界から大きな富をもたらすだろうとドレヴニーヤ氏は言っていた。
この階層だけでもものすごく広かった。レイルウェイがなくては今日中にはたどり着けなかっただろう。
今日から日記をつける。明日からはドレヴニーヤ氏の助手として働いていく。明日からの生活は楽しみでしかない。

生涯を通じて真に自身を理解するものはただ一人としていないだろう。
などと哀れな被害妄想に陥るものは少ないが、
実際のところ、その妄想は正しいものだ。
一生お前を真に理解するものなどいやしない。
この世には、あの世にも？誰もお前を理解するものなどいない！
自身を含めてな。
だが、それは万人が万人同じことなのだ…。

自分に興味があるのは所詮(しょせん)自分だけだということだ…。
自分自身が一番遠い存在なのにな！いや、だからこそか？
お前の顔を直に見てみろ！目玉をくりぬいてやろうか？
そうすればこの世で一番情けのない顔を拝めることだろうよ！
腰のあたり尻の穴の上を見られるか？馬鹿と書いてあるぞ！フハハ！
さて、他人とともにいたいと思うのは何故か？
自分を理解するためだ。他人との対比によって自らを理解したいがためだ。
その人となりを無意識的にまたは意識的に比べ、自らの存在を確かにしたいがためだ。
理解しつつ、その自分の存在を見せびらかすように自慢したいがためだ。
……実際のところ、各々で
世界は、
現実は、
解釈は、
違うがために、功をなさないのだがな。
虹は何色だ？
アメリカ人であるアンドリュー、お前には六色に見えるだろう。
しかしあの男、ロシア生まれのドレヴニーヤには四色に見えるだろう。
このように我々は価値を共有しているつもりになっているだけだ。
もしかしたら、お前が赤だと思っている色は他人には青色なのかもしれない。
他人にとっての青色がお前にとっての赤色なのかもしれない。
だが人間はそれらの、各々の色の見え方など無視をして、赤という定義にその色、
実際どのように見えようとも、
お前にとっての赤と、お前以外にとっての赤を同じものとしてい

る。

そして、結局のところ。

誰が正しいかなど、その答え合わせなどできないのだ。

各々見ている世界が違うからだ。

？？？？詰まるところ、お前のこの世界を正しく認識できるのはこの世界の主（あるじ）たる自身（おまえ）一人だけだということだ。自身（じぶん）の世界で他人になど目を向けるだろうか。

共有世界では、そうではないかもしれないが。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　Ｅｎｄ.

Ｎｏ　ｏｎｅ　ｋｎｏｗｓ　ｎｏｔｈｉｎｇ.

０－４　／　０章完（後書き）

七色の虹は日本などアジア名物でございい。
芸術的感性の個人差や民族差にはやっぱりそういう各々の見え方の違いもあると思いますよ。
だから独りよがりな考え方など共通世界ではゴミ屑にも等しいものなのです。
次から一章、やっと本編です。

1―1

「来たよ。来た来た。間抜けな奴隷が本を持ってやって来た。超克の時は此処に来た。来たるその日は明日か今日か。はたまた巡る幾許の時か。」

？？？？？救えぬ卑怯者に救えぬ医者を救うことができるか。

「配達？」

「そうだ。身寄りのない死亡者の遺体を先方は欲しがっているそうだ。正直気は進まないが…。発展のためだ。まあ、死してしまったのだ。申し訳はないが、本人も怒りはしまい。１０階層北区にある研究所、トマス博士の元へ運んでくれ。場所は北西駅から少し北に行ったところだ。まあ、有名人だから警邏にでも聞けばわかるだろう。案内してもらいなさい。」

先生の顔色は浮かない。昨日どうしようもなく消えてしまった命。医者はその責任を取るべきだと考える人は多い。

事実、最近は罵詈雑言を遺族から叩きつけられることも多い。

先生は必死に努力をしている。一人でも多くの命を救えるように。

だが、どうしようのない場合だってある。

「屍体…昨日の問題の患者さんのものですね。」

「ああ…。本当に…。」

「先生！先生がお気に病むことは…。すみません。ですがあの病気は仕方ないのでは…。」

「仕方ないで済ませられるほど人命は軽くないのだ！いや、本当に…。どうかあれにかかる人が少なくなればと、祈るしかできないのが悲しいところだ。」

目に見えて落ち込み出す先生に、僕は精一杯フォローすることしかできなかった。

ここのところ都市で増えている病気。

???白血病。

不治の病として有名なそれが多発しだしている原因の解明に、皆躍起になっている。

どこの医院も匙を投げる病気の急な多発は医師会でも最重要課題となっている。

年齢、性別、階級に一切関係のない発症に都市は一種のパニック状態にあるらしい。

それを裏付けるように、今の都市ではよく分からない意匠の金属の札が流行している。

白血病予防に役立つという品物らしい。

馬鹿らしい。と笑いながらも財布の中に入れている先生を見て、なんとも言えない気分になったのはつい最近の話。可能性にかけるというものか。

「では行ってきます。先生。」

「あと、そうだ。手間賃だ。何か好きなものがあったら買ってきて良い。今日は一件の診察だけだしお前の休みとしよう。それとミスタートマスは頑固で気難しい人だ。が、彼はこの都市の有力者だ。まあ顔見知りになっておいて悪いことはないだろう。なにか話を聞くことは不利益にはなるまい。そもそも会う機会もめったにないような人だ。まあ、行って来い。」

うなだれた体を起こして小銭袋を渡してくる先生。その顔色は栄えない。

「あ、ありがとうございます。」

衣・食・住・職。それだけでも十分嬉しいことなのに給料ももらえるとは思っていなかっただけにすごくありがたい。今日はできれば新しい服でも買いに行こう。

北区は所謂(いわゆる)商工業街だ。

七層では煙をもくもくと出す工場も多かったが、十層にもなると目立つほどには少ない。

北西駅はレイルウェイの駅のみならず、コグレイルの駅も兼ねていたため行きやすかった。

どうやら北西、北東、南西、南東の四方がコグレイルの駅でもあるらしい。

七層の北西へレイルウェイで向かいそのままコグレイルに乗り換えて上層へ。

ここから北区の方へ環状大通りを少し歩いたところにそれはあった。

????エディスン研究所。

そう。紹介状にあった宛先はトマス・エディスン。

要は街灯の偉い人にお使いを出されたということだろう。

どういうつながりなのだろう。帰ったら先生に尋ねてみよう。

その研究所は工場ほど大きくはないが家としてはとても大きかった。

そう、家。

金属の壁に打ち付けられた看板が付いていなければ、恐らくは大

きい邸宅程度にしか思わなかっただろう。
ライオンを模した意匠のドアノックを叩く。
金属同士を叩いたような、ドンともカンともつかない音がする。
重厚で腹の奥まで響く、そんな音だ。
力加減がわかりづらいのはお上りさんだからか、それとも外出など滅多にしない引きこもりだったからか。
はぁい。と言って出てきた初老の女性はさて、給仕さんか奥さんか。
柔らかい物腰の快活そうな初老の女性はこちらを笑顔で迎えてくれた。

「ドクタードレヴニーヤからの使いです。お荷物をお届けしにまいりました。」
「あらあら。どうぞおあがりになって。主人を呼んでくるわ。少しだけ待っていて頂けるかしら?どうぞこちらへ」
「ありがとうございます。」

通された部屋は柔らかいソファに艶のある木の低い机、暖炉に観葉植物、と品のある部屋だった。
先生の部屋も上品でないわけではないが…。
机の脚や様々なところにささくれができているのが惜しい。
いや評点できるような立場にはいないが。
暖炉の上には植物以外にも様々な装飾が飾られていた。
写真立ての中では若き日の先の女性、エディスン夫人とおそらく目当ての人物、トマス・エディスンと思しき男性が微笑みを向けながらこちらを見ていた。

そういえば先生の暖炉の上にも写真立てはあった。
こちらは写真を下にして置かれていたが。
一度掃除した時に直したのだが、気がつくとまた元に戻されてい

た。
その写真も若き先生とその奥方と思われる美人さんが写っていた。落ち着いた先生に相応しいような、穏やかな暖かさを感じる笑顔を向ける彼女を、僕は見たことがなかったが、何かありそうだったので積極的に聞こうとは思わなかった。
写真を伏せて置いてあること自体先生の未練が垣間見られたからに違いない。
帰って「未練がましいバツイチ中年てどうかと思うの」などと言おうものならば、せっかく築けた今の良好な関係は一転アラスカ州のような冷たい風の吹き荒れるものになるだろうことは想像に容易い。

「待たせたかね。」

などとくだらないことを考えていたら、扉を開いてやってきた初老の男、白髪混じりの茶髪で凛とした顔の彼はそう言いつつ僕の対面に座った。
落ち着いたダークブラウンのスーツに身を包んだ彼は６０歳くらいだろうか。
目尻や口元の皺は彼の老齢を主張していた。
それでも金色に光るジャケットのボタンがそんな彼を目一杯お洒落に、若く印象付けるよう仕立て上げている。

「いえ。お邪魔をしてしまい申し訳ありません。これがドクタードレヴニーヤからの手紙と…これが件のお荷物です。」
「荷物…な。ドレヴニーヤからは電話で聞いている。」
「ええ。本当に残念でした。」
「ご苦労だった。これで研究も捗るだろう。ゆくゆくは白血病の治療方法の発見にもつながればいいのだが…。」
「不躾な質問ですが、これでどのような研究を?」

純粋な興味だった。屍体を使う実験とやらに。
街灯など電気系で高名な卿がなぜこのようなものを。
畑が違うといえばいいのだろうか。
医師の心得があるとは思えなかったし、あるのであればそれはもう天才を超え超人としか言いようがない。
この質問をトマス・エディスンその人はどう受け取ったのか。
穏やかな表情を浮かべながらこちらを見て話してきた。

「純粋な興味からのようだからお話ししよう。死者との電話を可能とする機械を作っているのだよ。」
「死者との…会話ですか。」
「ああ。君は、人はどこからくると思う?」
「どこから、ですか…。というと母体からという答えしか持ち合わせていませんが。」
「まあ、医学的にはそうだよな。そうではなく、もっと根幹的なものだ。魂というべきものであろうか。過去の実験でギロチンで首を刎ねられた囚人に名前を呼ぶと目を開き反応することはわかっているのだ。それは知っているか?」
「ええ、と。そのような記述を目にしたことなら。」

嘘です。
いや先生も話してくれなかったしまだ医術の道に足だけ浸かって一ヶ月経ったかくらいですが故。
そのくらいの小さな小さなプライドを守るための小さな小さな嘘くらいは許容していただきたいところ。
エディスン卿はそれを聞き満足したかのように微笑み、こう言った。

「なぜだ?」

「えっ。」
「なぜ人は首を切られても生きている?首を切られたら死ぬなど当然のことだ。だが刹那にも近い生の猶予がある。それはなぜだ!」
興奮したように仰々しく声を貼る彼に僕は何も言えなかった。
僕の知識不足のせいで何も言えないのもある。今日は聞きに徹します。
そんな僕の心を知ってか知らずか、いや多分知らないんだろうけど。それはそうだ。彼は語り続ける。
「人の魂の行いだ!最期を他人に決められたが故に生の猶予(ゆうよ)が生じた。魂の、中途に終わらされた人の、残りの人生分のエネルギーが首を切られても生きることを可能とするのだ。」
すっとカップに手を持って行きコーヒーを啜(すす)る卿の目にはなにか熱い気持ちが映った気がした。
「人の魂はエネルギーなのだ。魂は肉体の死後も存在する。肉体を動かすのは多大なエネルギーがいると考えて、記憶は大してエネルギーを消費しないのだ。子供は燃料満タンの自動車(モービル)で今の私は燃料3分目のモービルと考えると理解し易かろう。記憶はその肉体を動かすエネルギーを頭脳に使用した場合だ。肉体を動かすエネルギーがなくなった時、この頭脳に使用したエネルギーの蓄積(ちくせき)、記憶を保持する魂はどこへ行く?私は電気というエネルギーでこれを発見、対話したいのだ。」
「電気で、ですか。」
「そうだ。ドレヴニーヤの弟子なら知っているだろうが、筋肉というのは電気的に負極でな、電気を流すと動くのだ。だから今手を足を首を動かしているのは電気なのだ。」

こうやってな、とぷらぷら手首を動かすエディスン卿はいたずらをするような笑顔をしている。話を聞くにあらゆる領域に途方もない知識を、アイデアを有する天才なのだと理解させられた。

「実験は一定の成果を収めている。郊外に身元不明の屍体があったのだが、頭部を切断されていてな。その頭部を観察していたのだが、最近、電気的な揺らぎのようなものを多く観測している。」

どきりとした。その様子に彼は少し狂気を潜めるよう目を細めた。

「もうすぐで結果が出るだろうと毎日楽しみなくらいだ。すまんね、どうも熱中すると。この方…男性だったか。残念だったが、彼とも！対話ができればいいのだが。そうなれば、きっと。」

何かを思案するような表情を浮かべ、ふふと笑い声の後、こう言った。

「魂が電気を生じられるのであれば、それに電気でアプローチできないと考える奴がいるだろうか。」

1－1（後書き）

（衣食住職南無阿弥陀仏…）

なおエジソンの魂うんぬんの考え方はこれであっている…はず。

あの頃はオカルトと科学は曖昧だったのです。

今もですが。

1―2（前書き）

問題：「死」とはなんでしょう
現在医学界でも揉めに揉めてる問題です。

1―2

十層にもなるとやはり中層以上上層以下という人も多いのか、店舗も数多くの種類があったがそのどれもが七層よりも高級品であった。

露天商も少なく感じる。

しっかりとした店構えが多く、何処も彼処もが当店が一番とでもいいたそうな雰囲気だった。

適当な店に入って手に取ったこのジャケットひとつとっても、型がしっかりしていて素材の滑りも良かった。ボタンの造形も気合が入っている。

が、このジャケットを買ってしまうと、他のものがあまり買えなくなってしまうので泣く泣く泣く今日は諦める。

ペタペタと店の商品を触っている僕を遠くから睨んでいる眼球二つ。

お前のような貧相な身なりの小汚い客が当店の商品を買える金を持っているのか？と言いたげな視線の元、店員さんの顔は険しく、怖い。

値段を訪ねた時点で、

「お客様、大丈夫なのでしょうか？」

と何がじゃと言いたくなるような口撃（こうげき）を既に喰らっている。

……頭か？

お前みたいなやつがこんな高級店に入ってどういうつもりだ？頭おかしいんじゃないの？大丈夫？

という大丈夫なのか。

まあ実際にはお前こんな高いもん選んで金持ってるんだろうな？多分持ってないでしょうけども、ぷーくすくす。

おい、本当にそれ買って大丈夫？家とか売らなきゃいけないんじゃない？

という大丈夫なんだろう。

……いやこんなには悪意はこもっていないんだろうけど。こもっていないよね？

本来は。本来はこのジャケットなど手に届かない高嶺（たかね）の花。

目玉が飛び出るに飽（あ）き足らず、全身からとめどなく粘液ともいえる体液が多量に垂れ流されるような金額のものであったが、

エディスン卿から手間賃といい渡された額は重さを感じる程度には頂けた。

ドレヴニーヤ氏の手間賃は硬貨幾枚（いくまい）かであった。

エディスン卿のものは紙幣であった。

……紙幣で重さを感じる程度には…。

邸をお暇してから開けたためこんなにいいんですか！とか本当にいいんですか！とか本当にありがとうございます！とか言う機会がなかった。

封筒でぱさともらった時に、

「あ、ありがとうございます。」

程度のお礼で良かったのかと今更な後悔を抱いている。いや実際はもっと酷かったのかもしれない。

「あ、ありあとござぁす。」

なんて発音をしていたのかもしれない。

これではまるで思考回路が原生生物のような本能に著しく寄っている事が露見してしまう。

次回あった時に、彼から図太く無礼で無知な愚者というレッテルが貼られていないことを切に願う。

まあ、ということでこの程度のジャケットなら三着は買えるのだ

よわっはっはと店主を札束（薄）で往復ビンタをすることも考えたのだがそんなことはせず店を出た。
今は質より数が欲しい時である。
また、僕はそこまで底意地が汚い人間ではない。はず。
それにしてもこの階層ではあまり買い物はできなさそうか…。
物価と品質がよそと違いすぎる。高すぎる。良すぎる。

「……というわけで帰宅した次第です。」
「道理で早かったわけか。もう少し暗くなってから帰ってくるかと思っていたぞ。」

何か書き物をしていた手を止め、呆れたような何か可哀想なものを見るような先生の表情はこちらがいたたまれません。
が、なんの買い物もなくのこのこと帰ってきた僕は何も言えないことは間違いない。
それにしても椅子に浅く腰掛けた先生は項垂れている。何かあったのだろうか。

「今日は診察だけだったのでは？もしかして…」
「そのもしかしてだ。」
「そのもしかして？」
「上げ足を取るな！ふっ…。少し元気が出た気がするよ。ありがとう。」

よくわからぬままに礼を言われ、はぁ。みたいな間の抜けた声が出てしまった。

「末期だった。何故ここまで放っておいたのだと聞いたら忙しかったのだと。まあどのみち発見が早くともなんともできなかったのだ

がな。ふっ。仲のいい知り合いでな。残念だった。」

涙を出したのか、顔が浮腫(むく)んでも見える。

口調を無理やり明るくしているのか、先生の顔は晴れない。

「おっと。まだ明るいな…。仕方ない。七層ならばお前に丁度いいような服もあるだろう。それに…今日は食事の準備も疎かだしな。」

少しだけ声に焦りのようなものが入っている先生。今からでも料理は間に合う気がするが…。

「そうなんですか？」

「そうだ。さあ、すぐにでも出発しようか。外食だ。」

行って立ち上がりジャケットを羽織り出す先生。

帰宅後にすぐ折り返しとは。

落し物に気づいたわけでもなしに。

まあ先生と外食も買い物も初めてだし、いい気分転換になればいいが。良しとしよう。

超克の時だ。考えなし。

死とは客観的には、非常に曖昧なものなのだ。

遠い存在になればなるほどその傾向は高い。

死んでいても生きていてもどちらにせよ変わらなくなるのだ。

お前は赤の他人が死んでも何も思うところはないだろう。

だが、身近な者の死は？

本当に辛い死を乗り越えるために、

耐え難き生を生きるために、

死を克服するために、

人々は神や霊や魂といったものどもを生み出した。

発明したのだ。
そして今、人々はそれらを殺したのだ。
死んだものの、生きていないものどもの、有り様を殺したのだ。
人々は天国地獄霊魂その他全てを消し去ったのだ。
死を克服するためのものの死とは…。なかなか面白いじゃあないか。

1―3

七階層北区はある程度の品を残しつつも雑踏と喧騒を孕んでいる場所だった。

店々は露天商のように道まではみ出て陳列した商品を見せつけているし、レストランにしても店内と店外テーブルの境が曖昧なところも数々だ。

シャッターを閉める位置でぎりぎり区切れるかという形か。

そんな街を多くの人が徒党を組んでぶらついているのだから動きにくくて仕方がない。がこういうのもまた一興というものだ。

先生の馴染みの店もそんな感じの店だった。

そこで適当に3着ずつ適当に（先生のセンスで）購入したならば、もうしばらくは服を買わなくても大丈夫だろう。

それなりの質感のそれなりの品をそれなりの金額で。というところか。

それでも合計金額はあのジャケットの半額以下というものだからいい買い物だろう。

「まあ、これらは大量生産の工場製品で、あちらは何かしらこだわりだのあるだろうものだから妥当なところだろう。」

と先生も言うくらいだしあの店もぼったくりというほどではないのだろう。

「それにしても驚いたぞ。あのトマス博士がお前に入れ込んでいるとはな。」

目的のある買い物を終わらせた場合、ふらつき適当に店々を冷やかし回るのもまたいいものだが、できるならばそれは師弟でしたくはないものだ。

買い物が終わりすぐに僕らは先生チョイスのレストランへとまっすぐ行った。
先生御用達のレストランは特に風に吹きさらしというわけでもなく、赤と青を基調とした暗い落ち着いたランプのいい感じの店であった。

「入れ込んでいる…ですか。」

ミートソーススパゲッティを食べる合間に受け答えをする。
シナモンの香りが強い肉肉しいスパゲティだった。
トマトも少し塊のようなものがある程度には荒くほぐされているが、風味がよく、ごろごろとしたひき肉とよく合う。

「そうだ。手間賃としてもお前がもらった額はあまりに多い。日雇いの助手並みの額をもらっているんだぞ。何をしたんだ?」
「特には。荷物を運んでから少しだけ研究内容を聞いただけです。」
「研究内容を!」

スパゲッティを口に入れる寸前で止めて、悪巧みをするように、にやりとしている。

「で、どんなだったんだ。今の彼の研究は。屍体の研究用途申請は大変だったんだ。それくらい知ってもよかろう。」
「彼は死後の人間と話をしようとしています。死後の魂についての話は非常に面白かったです。」
「スピリット・フォンか!」
「ええ。いろんな話を聞きました。首と胴体が離れてなお活動するのは何故か、魂と記憶はエネルギーである、などと。勉強になりました。」
「魂がエネルギーで記憶はその蓄積か…面白いな…。」

先から驚いて話を聞いている先生に驚いた。だって、

「先生は生と死の区別ははっきりつけているものだと思いました。意外です。」

「生と死…？まあ、それにしてもトマス博士もすごいな。」

空になった皿を持っていくウェイターに目もくれず髭のない顎をさすりながら考え出す先生と同様に僕もまたエディスン博士の理論に改めて興味と関心を寄せていた。

「子供が元気な理由や人が衰えていくメカニズムなど説明できていますよね。」

「まあ、彼はこの都市に明かりをもたらしたほどの天才だからな。あの頃は誰も彼もがそんなものありえんと喚いていたからな。今ではそいつらがランプを活用し、誇っているのだから面白いものだ。それに、お前の今日運んだ荷物。あれを縛るというかまとめていたガムテープ。あれもトマス博士の発明だ。」

へえ！粘着性のあのテープは最初使った時には本当に驚いた。少しふざけて先生の頭につけたら殴られるほど怒られたのを覚えている。

頭の形が変わるかと思った。

そのあとのテープを剥がすのに苦心する彼を見れば文句など言えるわけもないが。

その時僕は人の頭に粘着性のテープを貼り付けてはいけないということを学んだわけだ。いや、ごめんなさい。

「これなら、また汚名を返上できるやもしれんな。」

「汚名、ですか？」

エディスン博士におよそ似合わない単語。先生はおどけたようにいう。酔ってる？

「口が滑ったが、まあ都市住人なら皆知っていることだ。彼は、そのだな。もともと１１階層北区の総合電社はエディスン総合電社という名前だったのだが、まあ、色々あってな。結果だけ簡単に言うと彼はその会社の名誉と実権を失ったわけだ。」

創設者だったのにな。と少し目を伏せがちに語る。

「利用するだけ利用してポイじゃあまりにも酷い話だが、まああれも色々汚いことをやったんだ。報いでもあるとは思うがね。さて、食べ終わったし…。帰ると、するか。」

時計に目をやりながらにこにこと先生は立ち上がるのであった。

帰る途中、先生は何か落ち着かなかった。急ぎ足というか。
呼吸も心なしか深く荒い。
僕がいなかったら駆け出しているんじゃないかというくらいソワソワとしていた。
どうしたんですかと尋ねると、そろそろだ、と何か噛み合わないお答えをいただいた。うん。
やがて家に着き、勢いよく玄関戸を開き先生は中へ入る。
そして手術室へ…駆けていく。

「先生っ！」

先生の様子がおかしい。今や脇目も振らずに走っている。
僕も買った荷物を放り出し急いでついていく。

手術室の、空いている扉を通り、すると、そこには。
それは人型の何かであった。
顔は屍体のように真っ青で、目は吊りあがり、白目しか見えない。
口は歪み、そこから泡がとめどなく出ている。
筋肉は膨張し、爪は鋭く太く伸び、破れた腹からは腸など内臓がはみ出て鼓動を打っている。
恐ろしいその光景に思わずへたり込む。
先から口がガチガチと絶え間なく音を響かせ続けている。
生きていないことは確実としてあれはなんだ。あれはなんだ！

「こんなはずじゃ…カレン…。」

先まで体調が悪そうだった先生が震える声でそう言った。
へたり込んで口をガチガチと鳴らしている。
顔は真っ青で汗がとめどなく溢れている。
先まで荒かった呼吸は、逆にすっかり静かになっている。
そんな状態で先生はふらふらと立ち上がり。
両手を軽く広げ、抱き寄せるように。あの、化け物のところへ…！
「カレンは眠っていただけなんだ…。起こすには仕方がなかった…
何が…？ああ、カレン…。」
「先生っ！」
危ない！と言い切ろうとしたところでその化け物の腕が振るわれた。
顔に生暖かいものが付く。
べちゃともぐちゃともつかないそんな音が鳴り、先生は…。先生は！

「うわあああああっ！」

震える自分をいきり立たせるように、僕は、声をあげ、メスを取

り、その獣に、刺す！
こいつは！よくも！殺してやるっ！
刺さった感触はする。背中に。確かに。
皮膚が、筋繊維が、内臓が。
プチュプチュと音を立て生暖かい血が噴き出し体内を蹂躙する。
手に暖かい液体の感触がする。
その手に握っている柔らかい感触は、手に滴る血の感触は、僕に吐き気を催させるのに十分だった。
グガアアア！
だがそれから響くのはこの世のものとは思えぬ呻き声。
肌が震え目を瞑りたくなる。
なんとも言えない獣の匂いにと手に感じる生暖かい液体の恐怖に、僕は先の考えを完全に捨てて。
吐き気などなかったかのように引いて、すぐに後悔をして。
まるで鮮やかに、手のひらを返すように、僕はただ恐ろしさで頭がいっぱいだった。

逃げろ。
逃げろ、逃げろ、逃げろ！

「ひっ」

思わず後ずさる、が何か柔らかいものを踏んでしまい尻から転けてしまう。
その時に頭上を大きな爪が空を切る。
尻にはぬちゃとした音と生暖かい感触。
手には硬い…。
これは…本？僕は、

僕は、本を、開く。

何故そうしたか、何故悠長にしているのか。
僕はわからない。僕のことなのに。他ならぬ僕自身のことなのに。
でも僕はわかっていた。本を開いたことを、それで何が起きるのかを。

わらわらとした文字が、意味をなさない印刷の染みが、轟き蠢き踊り出す…！
これは、なんだ。

それは亡き者達、今は死した神話のもの。御伽噺の住人のもの。
それは思念、言葉無き者の伝える思い。
それは力、根元にある本当のもの。

そして僕の景色は、視界は、時を止め、色を失う。
かすかに聞こえていた日常的な音、その全てが聞こえない、完全なる無音。
塗りつぶされたような真っ暗闇の中、僕の手は視界に見えた。
僕の呼吸、息遣いだけが、荒いそれだけが。
ただただ黒い虚空（こくう）へと消えていった。

「超克（ちょうこく）の時だ。さあ、答えてもらおう。」

蒸せ返るような無音の中で、その男はまるで、仲のいい隣人のような気軽さで僕にそういってきたのだった。

「死について、お前はどのように考えているのだ？」

手に持った杖を遊ばせながらその男は言う。
白い髪を後ろに流し白い顎鬚を生やした白目玉の老紳士は、そう、

言う。
音はしない。
限りなく無音の中、その男の呼吸音など、わずかな音すら聞こえない。
聞こえるのは僕の荒い呼吸、それだけだ。
そして、ただ声だけが、言葉だけが無音から聞こえていた。

「お前はこれから人を、もしくは人でないものを殺めなければならない。
そいつの生を奪うのだ、終わらせるのだ、死の状態にするのだ。
いや、それだと何か変か…。だが惨たらしく殺すことに違いはない。
死とは何か。
人々はそれから、その問いから意識的に、または無意識的に、自身を遠ざけている。
死とは恐怖の根源なのだ。
恐怖。それは、飢えを、暴力を、失敗を。
それらを恐れることは、恐怖することは突き詰めれば死への恐怖なのだ。
恐怖から逃げることは、避けることは、なるほど。正しいことなのであろう。
本能だからな。ライオンに襲いかかる兎が居ないよう、それは当然なことなのだ。
だが、」

だが、男は言葉を続ける。
男の杖はまるで物理法則など知ったことではないようにくるくると遊び続けている。

「だがお前は理性的であり、かつ、生きているのだ。

逃げることが多くの場合何も生まないことは言うまでもないことではないのか。
さあ、向き合って答えてもらおう。死とはなんだ。」

死とは。

「死とは…。」

死とは。
死とは。死とは。
僕は知っている。死とは死ぬこと。生の終わり。だが、それは。
男はにやにやとこちらを眺めていた。腹立たしい気は起きない。
僕はわからなかった。
知ってはいても、わからなかった。
そのことをわかっていた。

「自分にとっての死は僕の終わりを指す。僕はそれをわからない。
自分では一生経験することはないだろうから。
痛みは経験するだろう。死は生きているならば必ずあるものなのだろう。
でも、僕が生きている間は経験しない。わからない。
僕から見ての死もわからない。僕はそれを経験するのだろう。
身近な人やそうでない人の死を経験したし、これからもするのだろう。
僕はこれから命を奪うのかもしれない。
それでも、僕が決まられることではない。何をもって死かはわからない。
肉体の滅びが死か、代謝の停止が死か、考えの停止が死か、社会に認知されないことが死か、僕はわからない。
その実在すら、僕はわからない。

実は死んだ人は死んでおらず、生きているのかもしれない。肉体で、魂で、地獄極楽で。
僕は、わからない。それがわかっている。」

「人間的な。あまりに人間的な。
傲慢（ごうまん）で高慢な人間的な答えだ。
死を否定、いや拒絶するか！
定義をさらに曖昧（あいまい）にしてお茶を濁すのか？
結局のところ、それは考えから逃げているだけだ！
だが、いいだろう。
考えない、という結論を考えから考えたことは、いいだろう。
お前にとって、死とは曖昧なものなのだろうな。
その解釈を許そう。
死は人が一生かけても知ることのできないものの一つだからな。」
？？？？そのあり方を、私は許そう。

男は杖を握り、その手に落ち着け、足取り軽く歩き出す。
こちらをちらと、にやりと見、そして彼はどこかへと消えていった。
靴音も杖の音も、少しばかりの服のかすれる音すらなく、彼はいなくなった。
元々いなかったようにもずっといるようにも感じられる。
彼は空気と同じ軽やかさで僕の認識をすり抜けて消えていった。
そして世界に色が、時間が戻る。本は閉じられている。
いつの間にか開けていた本は閉じられている。
まるで最初から開いていなかったかのように、僕の右手に収まっていた。

「グワアアアアアア！！」

目の前にはあの化け物がいる。
変わらぬ姿でそこにいる。
だが僕は恐れも怒りも何も感じていなかった。
僕は本から力を取る。
本には力はしまえない。しまえるのは知識だけ。
そもそも力は手に取れない。
だが僕は本から力を出す。
そしてその力を力の限り振り抜く…！
その軌道は僕の目からそれ以外へと降り注ぐ視線そのものだった。
まるで憑依されたかのような感覚で、一万回繰り返してきたかのような感触で、まるでこの瞬間だけその全てがここに集中したかのように、僕はその力を振る。
無我夢中というわけではなかった。
むしろ意識をそちらには向けていなかったようにも思える。
だが僕は集中していた。
面白い本を必死に読んでいる時のように、僕は周囲を認知できなかった。
前を向いていても。
だから僕が気がついたときには化け物が倒れていることに気がついた。
僕はどのように、どうしてそれを退治、いや殺害したのかはわからない。
知らない。
この手で殺めた感触も実感もない。
わからない。

だが、だけども、僕は。
僕は、僕は、僕は。

「それで良かったのよ。」

「誰です？」

時間が止まったわけでも色が失われたわけでもなかった。

そこにいた女性はいつか見た人。

「初めまして。と言いたいところだけども。もう恥ずかしいところを見られてしまっているわね。」

ふふと笑いながらあの化け物の屍体、まるで外傷の見当たらない、そんな屍体を労わるようにさする彼女はサプライズパーティーの準備に夢中になりすぎてばれてしまった時のような顔をしていた。

「どんな顔よ…。それ。」

「そんな顔です。」

きっとクラッカーの紐をつまみながらパーティー帽の下ではそんな顔をするのだろう。開けられていないクラッカーの口が哀愁を誘うのだ。

「なるほ、ど。ふふ、面白いわね…。あなた。」

”立てば芍薬（しゃくやく）座れば牡丹（ぼたん）歩く姿は百合の花”という言葉は彼女のためにあるのだろう。

とても綺麗な人だった。

町の男たちはその姿を見ると十人が八人は振り返るのだろう。

なお振り返らない人の内訳は一人が不能（インポ）で一人はゲイだ。

彼女の笑い方もまた、上品の極みみたいなものであった。

曲がる唇は赤く艶（なま）めかしく曲がり、目尻の下がり方は彼女をより魅力的に引き立てていた。

彼女の後ろで薔薇が咲き乱れる様子は想像に容易い。

「からかっているでしょう。」
「やはり、わかります？」
和(にこや)かなれども少し怒気をはらんだ彼女の声。
我ながらどうかしているんじゃないかというような比喩だった。
立っても座っても歩いてもこれなら、きっと変顔をするときにはシクラメンにでもなるのだろうか。
いやそれだと変顔にしては可愛さが残りすぎる。ラフレシア、でどうだろうか？

「それも言い過ぎよ！」
「でも、お綺麗だというのは本音ですよ。」
「あら、ありがとう。」

軽く往(い)なされてしまった。
僕のようなシャイを体現したかのような、
というよりもシャイの代名詞とも言える、
というよりもシャイが顕現したもののような男子は、お世辞でも綺麗だとか可愛いだとかそういった類のことを言うのは稀で恥ずかしいというのに。

「嘘ばっかり。」
「そうですね。」
「あなた、あの人にもそんな嘘をついていたの？あの人、知ったら怒ると思うわよ。彼、ああ見えてそういうのに鈍い分ばれると後ですごく怒るんだから。」

僕は先生に嘘をついたことはない。

「嘘吐き。」

嘘じゃない。本当のこと。

「嘘ばっかり。」

「解釈の違いです。」

「もう、頭が回る人ってそういうことばかり。あの人だって何回私に隠れて変なところに行っていたことかしら！私全部知ってるんだからね。あの人、私が嘘をつくと怒る癖に。まあ嘘なんてついたことないんだけど。」

「それは本人に言ってください。」

「そうね。近いうちそうするつもり。でもそっちの彼にもよろしく言っといてね。怒ってたぞって。」

「そっちの彼？」

だって先生は。

と、後ろを振り返りそうになったところで彼女はぱっと僕の顔を両手で包み込んだ。

彼女の親指は頬を撫で、４本の指で耳のあたりまで触られる。

初対面なはずなのに、そんなことをされて不思議と嫌な気はしなかった。

サラサラとした感触の、暖かい感じのする手だった。

「見ては駄目よ。彼はきっと6枚に下ろされてはいないわ。だからこっちを見ていて。後で彼は元気に話しかけてくるでしょう。今は気を失っているだけ。」

彼女は僕の顔を引き寄せて、拳一つ分の距離まで顔を近づけ。

言い聞かせるように。

そう、言った。

艶のある林檎より赤い唇が、水晶のようにきらきらと、一切の景色を反射して輝く茶色の目が、近づく。

息遣いは聞こえない。鼻息とか聞こえても不思議な距離じゃあないが。

「デリカシーないこと考えないで！」

「女性に息のうるささや体臭や毛の話題は禁物ですか。」

「それに歳や外見的コンプレックスやその他様々な事もね。」

様々、などという便利な言葉で僕は多くを察した。

「察しても口に出さないことね。それにしても、あーあ、全く。私の死に様は綺麗に儚くって決めてたのに。」

「決めたいらっしゃったんですか。」

「そうよ！もう！それがこんな！これ見て私だって分かるのなんて、まあ、あの人は分かるにしても、エディスンさんとテスラくんだけじゃないの？」

知った名前がひとつ。

「エディスン博士をご存知で？」

「当たり前よ。私、彼のところで働いてあの人と出会ったんだもの。あの人、若い頃は顎鬚がトレードだったのか大事に大事にしてたのよ。それを口髭に変えさせたのが私よ！」

すごくどうでもよかった。

「昔はあの人もお調子者でね。今見たく落ち着いているのも私によく見られたかったからなのよ。なんてこと話したって知られたら怒られるかしら…。」

それは割と興味があった。剽軽な先生…。
あわわわと今更饒舌のツケに震える彼女を僕は知っている。
だから名前は尋ねない。

「とにかく伝言よろしくね！あの人に私が怒ってたってことと、あなたも心残りがないようにと。」

僕は深く考えずに首肯した。

パッと目が覚めて、すぐそこには男がいた。
僕の狭い部屋のベット横の椅子に腰掛けてこちらを見ていた男がいた。
あれからのことの記憶がない。確か僕は先生の奥さんと話をして…。

「どうした？」
「っ！」

布団から体だけ起こし、彼はその隣で僕を覗き込んでいた。

「何をそんな目で見る？アンディよ。ふむ、慣れんものだな。」

ぶつぶつと何かをつぶやき始めるその男には傷一つ無かった。
ここは僕の部屋で。ぼくの布団で。
その横で上機嫌そうに語る男を僕は知っている。それでも。

「えっと、どなたですか。」

尋ねなくてはならない。

「既知の人物に対して自己紹介を求めるか！はっ！それもまた、いいな。」

声は笑っている。顔も目も笑っている。

がしかし笑わず、顎鬚をさすりながら彼は言った。

「ドレヴニーヤ・スーチだ。医者をしている。これで満足か？は！」

「でも先生は！先生は…。」

「それはお前が決めることではなあああい！」

先とは一転彼の声は、顔は、目は、怒っていた。

がしかし彼は怒っていなかった。

「実際のところ。こんな簡単なことを言わなくてもお前は知っているはずだ。人の生死は誰が決める？当たり前ながら誰も決められないのだ！それともお前は生きている個人に向かってお前は既に死んでいると言いたいのか？遠くゲルマンの狂人は神に向かって同じことをしたそうだが。少し飛んで、ありえない仮定の話だが或る日突然お前がお前でない誰かに入れ替わっていたらどうなると思う？よしんば私が仮象だとしたらどうする？実際のところ、他にはそれほど影響はないのだよ。ま、当事者は！たまったものではないが。」

ぴくりとも動かなくなった僕を彼は、先生はいたずらを成功させたようなしたり顔をして、

「そんなことを言わなくても、お前には私が誰かわかるはずだ。アンディ、でいいのかな？」

一言いい、部屋から出て行った。たん、たんと階段を降りる音。

「そうだ！今日も仕事があるぞ！通常営業だ！適当に準備を済まして下へ降りてこい！」

と階段から壁越しに響く声。

はいと大きく返事をして、まだ寝ていたいと叫ぶだるい体で起き上がり下に向かうのだった。

手記　7月16日

昨日今日起きたことを言葉にするのは非常に難しい。

色々ありすぎた。

もしあんなことがなかったのであれば、エディソン博士の不思議な研究や今までの発明品について詳しく書いていただろう。

昨日帰ってきてから起きたこと。

掃除をしていると本当に昨日のことが鮮明に思い浮かべられる。

あれは間違いなく現実だった。

だが実際には先生は死んではおらず、僕が踏んで滑った、あの肉片も先生ではなかったということなのか。

手術室を掃除したが、先生らしき肉片は見当たらなかった。

元々なかったかのようにも感じる。それはそうか。

先生は生きている。

きっと壁にでも叩きつけられてだけだったんだろう。

あの化け物についてはすでに布で縛られていて出荷準備万端といった形だった。

明日にはエディソン博士のもとへ運びに行く。彼ならなにかわかるだろうか。

1－3（後書き）

バトルなんて無くなればいい
というか無くす方向で修正かけてますが、うん。
知は力（物理）は無理がありますぜ兄貴

なお死についてはぼかしましたが、次回の章エンディングで白い人が答えてくれます。

１－４　／　一章完（前書き）

一章終わり
始めだからか無理矢理な展開が多いですね
落ち着いた起承転結を目指したいものです。

1－4　／　一章完

「狭苦しい場所だ。」
「はぁ…。」

はぁとしか言いようのない時もある。
何か突拍子も無いことを聞いた時、心底どうでもいいことを聞いた時、訳のわからないことを聞き流す時、何か理不尽なことを言われた時。
今回の場合はなんですかいきなりというニュアンスを内包した突拍子のはぁだ。

「土地はまだまだ余っているのに何故こんなに密集したがるのだ。寂しいのか？それに凝集したらしたで今度は疎遠になる。訳のわからんことだ。」
「そうですか。」
「そうだ。都会のオアシスと比喩されるがその根底は暗に都会が砂漠並みの居辛さがあると揶揄（やゆ）しているのさ。言わば、都会の隣人は砂漠の隣人か。誰も彼もが自分自身のことに精一杯で周りも見えないならば、それはこうも疎遠になるか。万人の万人に対する闘争は実のところ止まってなどいないのだ。」

「はぁ。」
これは聞き流しのはぁ。
「鴉の集団や蟻の専制政治、狼の部族支配も遺伝子で闘争状態を停止させられている。同種に対してはな。だがもし世界中に彼ら一種しか残らなかったならば？闘争状態の停止は血統や同郷などに縮小

されるだろう。人間は今その状態にあるのだ！他の種族のあらゆる存在を無視できるからな。今、人間は国、地域、家族。同僚や同業、友達。そんな適当な仲間意識でまとまって他の適当なまとまりと闘っているのだ！集団の集団に対する闘争。どうだ？」

「はぁ…。」

どう…といわれても。

ええそうですねといえばいいのか、なんなのか…。

考えたこともないし考える必要もないし。

「それだからお前はどうしようもないのだ。前任者はもっと見所があったぞ！よく聞け！魂や死後や神様やその他の雑多なくだらないことは全て無いのだ！おとぎ話とか聖書とかの類の亡きものどもが一度でもお前を助けたことがあるか？実際にはそれはあるのかもしれないが、無いのだ！全ては此処にある者らの為すことだ。今のところはな！ここを見ろ。何がある。よく観察しろ。それはどうしてこんな形をしている？それどころかどうして存在している？」

早口で捲し立てる先生は完全にスイッチが入っている。

「生の対義語は死ではない。非生だ。タンスがしゃべっていることを聞いたことがないか？限界までに入れられることを酷く嘆いて、お前の右足の小指を虎視眈々と狙っているぞ。お前の右足の小指の爪が何を思っているかわかるか？洗わなさすぎてうんこの匂いがするとぼやいているぞ。否定してみろ。おお、簡単にできたな！じゃあそれを証明してみろ。おお、できないものだな。自分と違う世界の理は判らぬのがこの世の常だからな！私か！解るはずがない！なぜタンスの気持ちなどに目を向けなければならない！そもそもそんな世界はあるかどうかも分からんのに？ま、涎べとべとのきったない糞餓鬼にしゃぶられる縫いぐるみどもの気持ちなら分らんでもな

いが。」

などと昨日からの先生は人が変わったかのように饒舌だ。

顎鬚をさすりながら、パンを頬張りながら、新聞を破りながら。

「今あるものを見えるもの感じるものを理解し解釈し考えろ。それは現象でありまたは仮象である。もしくはその両方であり、その両方でないかもしれぬ。それがそこに在ることを当たり前と思うな。それはある者の意思でそこに在る。意思の主は、自身かもしれないし他人かもしれない。もしかしたら人間ではないかもしれないし、そもそも意思など持っていないかもしれない。その意思を理解しろ。そして、お前の周りにいる誰かが何かがそこにいる必然性に目を向けろ。くだらないと一蹴する前にまずは一度考えてから判断してみろ。」

捲(まく)し立てたれ脳内がパンク寸前であることを許さぬ追撃。これは急いで外に出よう。

「どこへ行く?ああ仕事か。行って来い!そして帰ってこい!帰ってこないと!少し、困ったことになるぞ…。元気でな!ははは!」

暖炉のそばで杖をくるくると遊ばせながら先生はそう言った。杖なんか所有していたのか。

すっかり変わってしまった先生を後にして僕はエディスン博士のもとへ行くのであった。

「アポも取らずに何事だ。」

博士はこの前の歓迎的なムードとは一転今日は不機嫌だった。

「何かあったんですか？」
「世間話をしに来たのか？要件を先に話せ。」
おお、ごもっともだが割りかし傷つく自分もいる。
ただでさえ家でも安らぎプレイスは狭いながらも楽しい我が部屋のみになってしまっているというのに。
「お荷物です。ドクター・ドレヴニーヤからの。伝言というか、その時の話もするように言われています。」
「屍体か？一体なくなってしまったから丁度良いといえばそうだが…。」
「なくなったんですか！？」
一大事だ。というと一昨日の僕らみたいなことがあったんだろうか。
「実験に使っていたあの頭部が消えてしまってな。いやなくなるような場所に置いていなかったのだからそうとしか言いようがない。それもさることながら電気反応が昨日から観測できないのだ。暗礁（あんしょう）に乗り上げたとでも言うべきか。元々目に見えぬ暗闇の中の航海にも等しいのだが。」
道理で不機嫌にもなるはずか。と、
「すみません。伝言というか、この屍体についてなのですが。ちょっと見てもらえますか？」
「ここでか。ここで開けると妻がうるさい。ただでさえこの前の屍体が来てから研究室に入ってきもしなくなったんだ。不本意だが、まあ、いいだろう。研究室に来たまえ。そこで開けよう。」
「ありがとうございます。」

であってるはず。この場合。前より重い荷物を持って研究室へ入るとそこは、そこには…！

「うわぁ…。」

声に出してしまった僕を誰が責められよう。

すごく散らかっていた。

床に所狭しと紙が散乱しており、埃の玉があちらこちら見受けられる。

ひどいところでは机と同じ高さあたりまで紙の山が積み重なっていた。

「妻がいつもはある程度片してくれるのだが。」

と言いながら書類を踏まぬよう指示してくるエディスン博士。いや、無理でしょう。

「さあ顔を拝ませておくれ…っ！これはっ…。カ…レン…？」

博士は台の上に置かれた荷物から布を剥がしそして、絶句していた。

その顔を、身体を、見て。ただ口を開けて立っていた。

やがて足元の書類など気にせずにふらふらと近くの椅子にへたり込んだ。

僕もこの遺体と対面したのは二度目だ。包むのは先生がやってくれていた。

改めて見ても、今では恐怖が滲み出てくる。

「これは…なんなんだ…。小僧…。」

言ってエディスン博士は睨むような鋭い目つきでこちらを見てきた。

「答えろ。」

僕もこれにはこういうしかない。

「分かりません。」

エディスン博士が落ち着いた頃、僕は改めてこの遺体について説明した。

白血病で搬送され間も無く死んでしまったらしいこと。

先生が何かをしたのか、家に帰ってきたらこうなっていたこと。

あの後、何かが起き、先生はまるで別人になってしまったこと。

博士もまた、この遺体の主について語ってくれた。

「カレンは私とドレヴニーヤの飲み仲間だった。仕事こそ違えど近所に住んでいてな。ドレヴニーヤが彼女を射止めた時、少し悔しかったのを覚えているよ。カレンは近所では一番の美人だったのだ。そのあと彼女が別居したと半ベソかきながらやってきた時は少しいい気分になったことを覚えているよ。その頃は私ももう妻がいたから快くなだめてやったが、今は冷静な彼奴が取り乱す程にはいい女だったよ。」

ま、今はこんな怪物になってしまったが。と、茶化したようでいて。

寂しそうに話す博士は普段からは考えられないような弱さを露呈していた。

「ドレヴニーヤは何か知っているはずだ。電話をしてみる。少し待て。」

言って席を立ち研究室から出てしまった。

ドレヴニーヤ先生。

彼の言っていたことは支離滅裂でこそないものの何を話しているのかがさっぱり理解できなかった。

万物に対する疑問。それを彼は持っていたのだろう。

聞けば博士、トマス・エディスンはそれを突き詰めすぎて公的教育を受けられなかったと聞いた。

そういうものに触れていない僕は特にそれがどういうことかはわからない。

バタバタと慌ただしい足音の後、バタンと荒々しく扉を開け博士は言った。

僕はそれを理解できなかった。

何が起きているのかも何がどうなっているのかも理解できなかった。

今思えば。今思えば先生が言っていたことはこれから起きることの警報であったのかもしれない。

なぜ僕が今ここにいるのか。これは先生が仕組んだものだ。あるいは先生でないものが仕組んだことかもしれない。

「ドレヴニーヤが死んだ。」

憲兵所にはエディスン博士も一緒に来てくれた。

遺体は我が家の近く、だが裏通りの真ん中に鎮座していたらしい。

裏通りといっても通行人が少ないわけではない。
こんな場所に屍体があるのならばすぐに通報されるのは間違いなく、また、発見時刻はエディソン邸に訪れた一時間前だということ、鋭い切り跡がおよそ僕には出来なさそうだということなどで、僕への疑惑はとりあえず霧散した。
僕の話を聞いていた博士は、ドレヴニーヤ先生が自分であの場所へ移動したのだと声高に主張していたが、聞き入れるものはいなかった。

「さて、問題は君の今後だ。」

憲兵さんの言うところによると、僕の市民権を証明していたらしいドレヴニーヤ先生がいなくなったことで、僕はここでの仕事と生活を保障する人、つまりは職と上司を見つけなければならないということだった、が。

「ああ、それは私が保障しよう。これから彼はエディスン研究所所属だ。」

という博士の鶴の一声でなんとかなった。さすがは権力者。
問題は遺産問題であった。
彼の部屋にあったらしい、封印の破られた手紙を見せてもらった。
そこにはこう書いてあった。

もしもの事態に備え簡潔に記しておく。
邸宅及びそこにある一切の荷物はアンドリュー・ライアンに譲る。
その後売却などをしても構わないが、お前の失せ物が済んでからにしろ。
また、失せ物はもう無くさぬよう体にくくりつけるなど一時も絶対に手放さないように。

あの杖は大事なものだ。わかっているな。
生活については差し出がましい希望であるが、できればエディスン博士にご助力いただきたい。
身寄りのない少年であることがかのライアン博士からの手紙に記してあった。
エディスン博士とライアン博士についてはその関係は定かではないが、悪い関係ではなかったと記憶している。
繰り返しになるが、どうか生前の関係において友好な絆を築いていたはずだ。
よろしくお願いしたい。
以上。

「これはまるで、というよりもまんま遺書じゃあないか…。あいつは死ぬつもりだったのか？いや、もはや死んでいたということか。」

手紙を読み、驚きそう言うエディスン博士。
憲兵さんたちはどうやらこれに目をと置いていたらしい。
だから僕への嫌疑も早くから失われたのだろうか。

「疑いも晴れたようだし、もういいな。それに私らにはやることが沢山ある。ありすぎる。」

そういい僕の手を引き早々と憲兵所を後にした。
その前に、

「憲兵さん！一つだけ教えてください。先生の遺体は、どんなでしたか？」

僕は先生に手を引かれながら、首などでぎりぎり後ろを向きながら尋ねた。

憲兵さんは困ったように頬を?き、やがて僕の顔を見て何かを決めたかのように佇(たたず)まいを改め、こういったのであった。

「6枚にばらされてお亡くなりになっていたよ。」

僕はとりあえずドレヴニーヤ診療所、僕の家になったあの館へ帰った。

先生は愛されていたのだろう。玄関前には沢山の花が置いてあった。

それらを踏まないよう、滲む視界で気をつけつつ、僕はソファへ座り込んだ。

「どうする?売るか?」

という博士の質問に対し僕はまさかと返している。

僕はこの場所を売るつもりはない。たった2ヶ月、それでも先生と共に過ごした思い出の場所だ。

気持ちを切り替えて。

さて、先生には杖を探すようにと言っていたが。杖は玄関前にある。

玄関前には靴箱があり、そこには特に見当たらない。となると。

「暖炉か?」

生前?いや死の寸前に先生は暖炉付近でこれ見よがしに杖をくるくる遊ばせていた。

華麗な杖さばきはサーカスでも通用するんじゃないかという見事さだった。

そんなことよりも暖炉付近を探してみるが見当たらない。
とすると。暖炉の中は…いやまさか。と思いつつ内心ここにあるんだろうなぁと当たりをつけてみる。
まさかここにはないだろうでもあるといいなあというその気持ちはさながら負け続けたルーレットで残り少ないチップを一つの数字にかけるような諦めと期待の割合が9：1と見せかけながら、その実2：8という極めて往生際の悪い荒んだ根性を表すかの如くだった。いやそこまで酷くはない。

そんな僕の気持ちに応えてか、いや応えてなどいないのだろうが、やはりそのまさかだった。
内心はやっぱりねという気持ちを先頭に陰ではあってよかったという安堵の気持ちたちが小躍りをしていた。
火のついていない暖炉の煙突の内側にあの本はガムテープでこれでもかというほどに貼り付けてあった。
ここまでするかと乾いた笑いに身をまかせるしかなかった。
例えここで見つからなかったとしてもベッドの下や屋根裏や机の裏側にでも隠していたのだろう。
煙突のガムテープを剥がすと布のシャツに包まれた本があった。
煤けた手で本をなぞる。
そして本を、開く。
がしかし、何も起きなかった。

死を克服するためのものらの死により、地獄極楽神霊魂（じごくごくらくかみれいこん）の類は否定がなされた。
要は人は全て恐怖の元、死という圧倒的な恐怖に再び晒されることとなったのだ！

人々は今、死を、その後を、それを意識しないことで保(も)っている。
多くは最期の最後まで意識しないのだろう。
目を背けるのであろう。
だが、生という太陽が沈み始めれば分かるのだろう。
影はどんどん面積を増やす。恐怖と同様に。
そしてやがてそれを認知できなくなる。
死ぬのだ。
昼を永遠に止(とど)めておけぬように、夜の訪れを止められぬように、
人は死ぬのだ。
それを見て見ぬ振りはできても、見ぬことなどできるはずがない。
だが、夜が来たから全てが終わるわけではないように、死がその
身に降りかかったとして本当に全て終わりなのか？
医者が言っていたら死なのか？
心臓が停止していたら死なのか？
眠っているだけなのかもしれないのに？

？？？？つまるところ、死とは想像の産物でもあるのだ。共有世
界では、そうではないかもしれないが。

Ｃｈａｐｔｅｒ　１　Ｅｎｄ．
Ｔｗｏ　ｏｆ　ｔｈｅｍ　ａｒｒｉｖｅｓ．

1－4　／　一章完（後書き）

二章では恋についてやってきます。
恋ってなんだと思います？

2－1（前書き）

恋について
さて、恋は必要のあるものなのでしょうか？
そもそも恋ってなんであるのでしょうか？

2―1

「恋人が行方不明？」

僕の言葉だ。

疑問を含めたイントネーションに彼女は短く、しかしはっきりと、はい、と答えたのであった。

あれから、というのを何時からにすればいいのか難しいところだが、あれから、あの忌まわしき事件、町医者バラバラ殺人事件が起きてから、僕はエディスン研究所の元で働いていた。

いたのだが、

「流石に技術はともかく、知識もなさすぎる。もう少し様々な見聞をつけて出直してこい。町の問題点でも見つけてきたらどうだ？そうだな、それなら…。」

という彼の鶴の一声で僕は呆気なく、それはもう呆気なくクビになったのであった。

一週間も保たなかった。

偏(ひとえ)に僕の能力不足の賜物でありますが故にぐうの音も出ない。

技術職でなくても、事務職であっても、様々な知識が要求されるその研究所には僕は無知すぎた。

そして彼から遠回しにだが指定された職業、探偵業の真似事のようなことをしていた。

真似事のようなもの、といったのは、僕が思っていた探偵業と実際の探偵業のギャップが激しかったから。

逃げてしまった猫を探して！から始まり、夫の浮気調査に敵対企業の悪評流布などが僕の業務。

最早何でも屋とか工作員とかそういったもののものらだった。

ものものしくもある。

今にスパイでもさせられるのではないかと内心戦々恐々とした日々を送っている。
で、今。

目の前にいる婦人、中層階級によくいる服装の、それなりの服装をきちりと着こなした若く美しい女性はこう、続ける。

「彼は都市計画技術士として最上層階にいるの。でも、最近は電話も通じずに手紙も返ってこないの。それだけならいいのだけれど…。」

成る程、聞いたことがある。
エディスン博士の研究員にも都市計画に携わっていた人がいたはずだ。
都市計画、この世界屈指の大都市であるウォーデンクリフの街灯、コグレイルやレイルウェイはこの計画によるものだ。
その理念は格差社会管理と都市の生産管理。
格差は現実的に階層で表され、その人数も上層階に行くほど少なくなるため、成る程、綺麗な管理が行われている。
また、生産はこの都市だけでも経済と生産が回ると言われているくらい徹底化されている。
おおまかな意思決定・思考は少人数、あとは考えずとも上手くやれる。

人々はこの都市を極楽とも称する。
いかなる階層の人々もだ。
貧しいとされる最下層の人々ですら他所よりは断然いいとにこやかに言うくらいだ。
そんな最下層に住むのにも徹底した審査などが行われると聞いた。
勿論都市の周りにも大きな郊外都市が築かれているが、そこの人々

の多くは都市機構内では働けず、結局郊外で働いたりするのだという。
その分、ドレヴニーヤ先生の遺産を引き継いだ形でここに住めているのは本当に幸せだと思う。
勿論エディスン博士の口聞きもあるのだけれども。

それはともかく。
彼女の彼氏さん、最上層階で技術士を任されるということは、それはそれは腕があったのだろう。
最上層階へは普通は立ち入りすらできない。
上層階ですら身なり顔つきが中層階級だと何度も何度も補導される。
…経験者は語ろう。
まあ、幸いのことながらその時の僕の場合にはちゃんとした理由（迷子の猫探し）があったために、早く僕にこの階層から出て行って欲しいと思っているのであろう警邏の人も交えた大捜索を発生させて、普段より楽に仕事を終えられ、かつ給料もいいというほくほく状態であったのだが。
そんな僕でも、最上層階へは入ったこともない。
行政区や官公庁があると言われているそこへは、よほどの理由とそれなりの立場がないと足を踏み入れられないのだという。
最上層階へ入ることの大変さ、そして凄さがわかっていただけただろうか。
だがしかし僕にはエディスン博士がいる。
あの人がいれば僕はすんなり入ってサクッと仕事を終えられるって要領だ。

「でも、行政府に尋ねれば分かるものではないのですか？」

そう。
そんな人物が最上層階にいるのであれば、音信不通なのであれば、

行政府に尋ねれば分かるはずなのだ。
直接、行政府に出向かなくとも、電話や各階層支部にでも聞けばこの問題は解決するはずなのだ。
本来であれば。
だが、今回は違った。
どうやら今回のケースではそうはいかなかったらしい。

聞いて、彼女は俯き、少しの間の後、悲壮感あふれる潤んだ目で、震える声を隠そうともせずにこう言った。

「行政府はその人を雇った記録はないって言っているの。」

2―1（後書き）

綺麗な「起」の話ができたと思います。僕は。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1618co/

ウォーデンクリフの世界システム　～世界の取扱説明書～

2015年3月11日01時28分発行